

第二十九回法華經・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー

## パネルディスカッション

司会 ただいまより、パネルディスカッションを開始したいと思います。進行役を蓑輪顕量師にお願いしておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

蓑輪 司会進行役をおおせつかりましたので、ただいまからパネルディスカッションを始めさせていただきます。四人の先生方に基調講演をいただきまして、それぞれの立場からご発言がございました。

今回のセミナーの一番のテーマは、「教科書にみる日蓮聖人とは」という点でございます。恐らく多くの方々が一番気になさっているのは、実際に教科書の中で出てくる四箇格言ではないかと思えます。「念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊」というこの四つの言葉が、日蓮聖人に対するイメージを形成しているのではないかと思っております。次は、ということが背景になって、このような表現になっているとお考えかについて、どのように先生方はお考えになっていらっしゃるのか。次に、ということが背景になって、このような表現になっているとお考えかについても、少しお聞かせいただければと思います。まず高橋先生から、ご意見いただけますでしょうか。

高橋 ほんとうに核心部分の話で、私は全く仏教史・宗教史に不勉強な人間でありますけども、四箇格言は耳に残る言葉ですので、これが一般的な日蓮聖人のイメージを形成するのに大きな働きをしていると思っております。

私はこの問題をどう考えようかと、いろんなアプローチのしかたがあるとは思いますが、鎌倉幕府の方から今日は考えてみたいと思つて、鎌倉幕府では、いったい仏教に対してどういうスタンスを取っていたのだろうかという形で考えてみた次第であります。これは、あくまで「鎌倉幕府が」ということですので、鎌倉幕府を構成する個々の武士たちとは、また別の問題になります。

見ていきますと、今日の話の繰り返しになってしまっていますが、平安時代の顕密仏教がベースにある。かつ、これもどうしてそうなったか、いろんな理由はあるわけでありませうけども、結果として十三世紀半ば、ちょうど日蓮聖人が鎌倉で活動しようとしているほぼ同じ時期、もつと厳密に言うところ、日蓮聖人が活動し始めるちょっと前ぐらいに、急速に鎌倉で禅宗と律宗というのが台頭してきた。そういうった社会状況が鎌倉にありまして、その筋から考えていきますと、そこが日蓮聖人にとっては一番目につくといえますか、克服しなきゃいけない課題というふうに映つたのだろうか。もちろんいろんなものがあるわけですけども、当時の状況から考えると、この四つを取り上げるといふことは、日蓮聖人にとって意味があつたのだろう。この四つに対して個別にそれぞれというだけじゃなくて、十三世紀半ばの鎌倉の社会で目につく四つの勢力を取り上げたのだ。そういうふうに考えてみると、どうだろうかと思つているわけです。

ただ、今日最後にご紹介しましたように、そうした鎌倉幕府の仏教政策から四箇格言を捉え直してみようと思つたわけですが、今回準備してしまつて気づいてきたのが、「念仏は、これではうまくいかない」と。念仏は、鎌倉幕府自身も「追放しちゃえ」なんて言っているわけですので、ここは今後もう少し検討課題なのか、むしろ鎌倉幕府の仏教政策という筋から考えていくのはちよつと無理なのか、そういうった問題があるのかなと感じております。とりあえず、これでよろしいでしょうか。

蓑輪 それでは中尾先生に、お考えを表明していただければありがたいです。

中尾 教科書をずっといろいろ拝見してきたもので、痛感したことが一つございます。教科書というのは、一言で言えば、日蓮について高等学校の授業で触れるのは、時間的には大体十分です。長くて二十分という、二十分というのは少ないのではないかと思うのですが、的確にこれをどう表すかということは、非常に難しいと思うことがあります。

それと、宗教の立場で教科書を批判するというのが、非情に難しいということです。教科書というのは一つの文脈というものがあって、その文脈の表われとしてさまざまな歴史現象を説明しているわけですので、そのところをどうわれわれが関与してくるかということは、非常に難しい問題があると思うのです。従って、日蓮宗でも、先ほど言いましたように、金子宗務総長が文部大臣に申し入れたということなのですが、それは全然意味がないことだと思います。

それと、もう一つ感じましたことは、日蓮宗の僧侶で、私もそうでしょうけども、日蓮聖人のイメージをどう自分で描いているかということが、非常に今のところ不安定なんじゃないでしょうか。「これが日蓮聖人だ」ということを、端的にきちっと話せる。そういうことをそれぞれが考えていきまさんと、結局、批判だけで終わってしまうのではないか。今から大事なことは、日蓮聖人のイメージを、自分自らが作っていくことだろうと思っております。ですから、教科書の役割と僧侶としての役割は、別だと痛感いたしました。以上です。

大塚 先ほど「説明の仕方」と申し上げました。教科書を書く先生方が宗教そのものに詳しいわけではないと思いますので、日蓮聖人の象徴的な言葉が「実はこういう意味なのです」ということを日蓮宗としてきちっと自己主張、説

明をしないと、教科書を書く先生方は固定観念に囚われて記述することになるでしょう。彼ら自身が受けた教育の固定観念に基づいて、四箇格言という言葉を使い続け、その意味や背景も踏襲していきます。最澄さんであれば「照千一隅」とか、それぞれの祖師固有のお言葉や教えが固定的に踏襲されていきます。日蓮聖人の場合、それは何かという事です。

多くのご真蹟や文献を残しておられる祖師ですから、今日お配りしたレジュメの中の三つめの「三度国を諫むるに用いずば、山林にまじわれ」などを四文字熟語にして、「三諫山林」という言葉をお作りになるのも一案ではないでしょうか。日蓮聖人は、人々を幸せにするために時の政権に何度も苦言を呈したものの、残念ながら受け入れられず、最後は身延山に籠もって人々の幸せを祈ったという説明の仕方をしたら、かなり印象が違います。日蓮聖人と聞いたら「三諫山林」という言葉が皆の頭に浮かぶようになれば、十年か二十年したら「四箇格言」は印象がだいぶ薄くなっているかもしれません。宗派の皆様ご自身が、どこに重きを置いてご説明されるかということに、すなわち説明の仕方に、日蓮聖人の印象もかなり影響されるでしょう。個人的にはそのように思います。

**襄輪** ありがとうございます。四箇格言を捉えて、非常に激しいニュアンスと、他者に対する攻撃的なニュアンスを多くの方々はイメージとして描くようになっていのではないかと思います。私たちが日蓮聖人を捉えるときに、この四箇格言で捉えていることが結構多いような気がします。

恐らくこれは、私たちがそれぞれのお寺で信者さんに向かってお話をするとき、使っている表現なのではないかという気もいたします。このような表現に至った背景、何を具体的に念仏無聞とか禪天魔、真言亡国、律国賊だと言ったのかというところをもう少し深く掘り下げて、明らかにすることも必要であると思います。それは、日蓮聖人にとっては恐らく生涯の中の一面であって、最も訴えたかった、実現したかったものが何であったのかということか

ら、日蓮聖人のイメージをどう形成していくかということが、恐らく問われるのではないかなと思います。

今、三人の先生方のお話を聞いて感じたところなのですが、日蓮聖人は鎌倉期の中ではかなり後発にあたっていて、浄土宗の法然さんの教えも登場し、禅宗の教えも社会的にある程度広がりつつあった中で出ています。四箇格言のよくな他宗に対する批判といえますか、問題点をしっかりと見据えたのではないかという印象を、私自身は持つております。それぞれの問題点が何であったのかを、先生方にお聞きしたいと思います。四つでなくても結構ですので、それぞれの立場から、四箇格言によって日蓮聖人が訴えようとしていた当時の問題点は何なのかということをお聞かせいただければと思います。高橋先生、いかがでしょうか。

**高橋** 非常に難しい問題ではありますけれども、顕密につきましては何となくイメージができると思いますか、大きなお寺を造るとか、そこで儀式をするということが顕密の大事なところになってくるわけですし、特に密教の場合はそうだと思うのですが、秘密の教えや宗教的な体験など、ごく限られた人間でないと感得できないという立場といいますか、そういったものを基本姿勢にしていますので、顕密に関しては、日蓮聖人の考えているところとは容れなかったのではないのかと思います。

では、顕密はどういう教えを広めようとしたのかというと、意外に突き詰めると難しいところがあるのですけれども、それでいながら、貴族社会もそうだし、鎌倉の武家社会もそうでありましたように、みんな顕密がベースになっている。それを何とか目を開かせたいといえますか、覚醒したいみたいなことを日蓮聖人は考えていたのではないのかなと思います。

律と禅についても難しいところがありますし、全部比べるのは難しいのですが、禅宗に関しては、少なくとも鎌倉社会を見ていきますと、ちようど日蓮聖人が活躍しだした頃に急速に台頭してきているわけですね。律もそうだと思

うのですけれども、急速に台頭しているところに、対抗心というわけではないのですけれども、危機感みたいなものを感じたのではないのかなと。まさに眼前の敵といえますか、そういった形で名前が挙がってきたのではないのかなというふうに思います。

先ほどの話の繰り返しになりますけれども、顕密・禅・律に関しては、鎌倉幕府の仏教政策との関わりで理解できるのですが、鎌倉幕府の仏教政策ではどうしても説明がつかない念仏の問題が、もしかしたら日蓮聖人にとっては最も大きな問題だったのかもしれないという感じがしています、私もそれには全く答えを持ち合わせてはいないのですが、蓑輪先生の最初のお話を伺ったときに、ちょっと言葉は忘れてしまったのですけれども、朝……。

蓑輪 朝懺法夕例時です。

高橋 ですよ。朝が法華経で、夕方が浄土教。ある意味、浄土教的な世界と法華経的な世界というのは、並ぶところがあつた。ここが日蓮聖人にとっては大事な問題だったのではないのかと思ひまして、それがどういふふうに大事であつて、念仏に関しては四箇格言で無間地獄として表現されるに至つたかということ、ちょっとそこまでは難しく踏み込めないのですが、むしろ念仏の問題と日蓮聖人の問題というのは、かなり大きな核心的な問題を抱えているのではないのかなと考えているところでありませう。話が全然まとまらなくて申し訳ないのですけれども、とりあえず私の考えは、以上のとおりです。

蓑輪 ありがとうございます。司会の立場で申し上げるのは問題があるのかもしれませんが、実際に当時の天台宗では、朝懺法夕例時で、法華に対する信仰と浄土に対する信仰が両方とも同居しています。懺法も例時も、両方とも修

行道の上では、手段は違いますけれども、同じものを目指しているというような感覚が少しある気がいたします。

ところが、日蓮聖人にとっては、念仏というのは無間地獄に陥るものだと捉えられています。恐らく日蓮聖人が天台の教学に基づきながら、法華経こそが釈尊の真意であると捉えて、念仏はそれ以前に説かれた爾前の經典に基づいていると批判しています。もう一つ、念仏によって浄土に生まれ変わっている人たちがいるのかどうかと考えたときに、日蓮聖人は出家をされてからしばらくの間、浄土に対する疑いのようなものを持っていました。それは、念仏を唱えても苦しみが亡くなっている人たちがいるというのを目の当たりに眺めてきていたからだと思うのです。そのところに少し原因があるのではないかと考えています。

これは私の意見で申し訳ありませんけれども、中尾先生は、どのようにお考えになりますでしょうか。四箇格言のそれぞれについて、どのような状態を批判しようとしていたのかということと、お話をお願いします。

**中尾** どうも教科書のことしか準備してなかったものからです。四箇格言とよく言われるのですが、四箇格言がほんとに日蓮聖人の布教の中でどのような意味を持ったのかということにつきましては、意見をまとめていないのでここでは申せません。戦国ぐらいいになりますと、戦国大名、あるいは信玄家法なんかは随分それをあげつらって、宗論を禁止するなんてことを言いますけど、それまでよく分からないですね。しかし、今日は、教科書だけにしていただければありがたいです。

**大塚** 私なりの理解で申し上げれば、前半生は政治家的にご活動され、人々の苦しみを具体的に解決することに力を注ぎ、幕府に何度も諫言したと考えると、見えてくるものがあります。たとえば、念仏無間は「念仏さえ唱えれば浄土に行ける」という教えに対して、「浄土に行ってから救われても遅い」という気持ちが籠もっているのではないで

しょうか。「今でしよう」というキャッチコピーが流行りましたが（笑）、日蓮聖人も「救うのは、今でしよう」というお気持ちで、先行していた象徴的な四つの宗派について、誤解を恐れずに今風の言葉で言えば、キャッチコピー的に「念仏無間」「真言亡国」「禪天魔」「律国賊」と表現したと解釈できなくもないと思います。

それぞれひとつずつ解説を試みれば、それなりの理由が考えられますが、共通して言えることは、現に苦しんでいる人々を救わないでなぜ仏教といえるのかという強烈な問題意識、使命感のもとに、先行する四つの大きな宗派についてキャッチコピー的に表現したと考えます。カルチャーセンター風の説明かもしれませんが、そのように感じます。

蓑輪 はい、ありがとうございます。中尾先生、どうぞ。

中尾 四箇格言をどう受け止められたかということを教科書流に考えますと、日蓮宗は開宗が他宗に遅れたため、諸他の宗派を排撃しながら広まったという話。四箇格言でしょうね。これはやはり、私からすれば、ちょっと説明がまずいのではないかと行って、ここを書いた方だろうと思うんだけど、笠原一男先生に随分異論を申し上げました。先生は頭の中には四箇格言とか折伏という言葉があっても、なかなか「うん」と言っていただけなかつた思い出がござります。やはり四箇格言というのは、当時よりも、むしろ近代・現代の中で生きてきたのかなという感じがしております。

蓑輪 はい、ありがとうございます。今の大家先生と中尾先生の発言に答えがあるのではないかなと思うのですが、具体的な人々の苦しみを、今、どうやって解決するのかというところに一番の関心があつて、当時既に広まっていた仏教が持っている陥りがちな問題点を、実は指摘していたのだらうと思います。念仏が無間地獄に落ちるといふのは、

日蓮聖人が小さい頃から見ていた念仏者たちが苦しみながら死んでいるという、臨終正念と違った状況が生じているというのを体験しています。また、死後に極楽浄土に生まれるといっても、今の問題が解決できないだろうと。こういう視点は、恐らく持っていただろうという気がいたします。

次に、禅天魔ですけれども、禅の実習の中で生じてくる問題点というのを、これは幾つも仏教学の中で指摘されておりまして。まず何が生じてくるかといいますと、心の働きを見つめ始めていきますと、普段の私たちの日常の心の在り方と違ったことをすることになります。今の一瞬一瞬を気付いていくということが、止や観の一番基本に存在しているのですが、普段の流れとは異なったものの観察の仕方をしていきます。

これは、『摩訶止観』の中に出てくる例えなのですが、普段の心の働き、流れを川の流れのようなものに例えれば、止や観の実習をするのは、川の中に棒切れを差し込むようなものだ。必ず流れている水が盛り上がり、山みたいなものを作り出す。それと同じように、私たちの心に過去に行ったことが思い出されて、苦しめられてしまう。あるいは幻覚のようなものが現れ、とらわれてしまう。このような問題が生じてくるということが議論される場所があります。恐らくそのようなことについて触れなければ、禅をすることによって、逆に苦しみを増やしてしまう人たちが登場してくると。これは天の悪魔ではないかというのも、何となく分かるような気がします。

次に、真言亡国ですが、加持祈祷によって国家が安泰になっていくというときに、これがどこまで現実の問題として解決手段になるのかというのを、おそらく見ているのだと思います。ちょうどこの時代は忍性さんが鎌倉で、京の方では叡尊さんなどが活躍して、元寇等に対して祈祷をしたことで、愛染明王の矢が飛んだというお話が出てきますが、実際に加持祈祷だけによって解決するととらえられないような事態も結構ありますので、そういうことに対する批判が生じてきていると。

最後に、律国賊に関しましては、今日お話の中にも出ましたけども、日蓮聖人がご遺文の中のさまざまところで、

街道筋で関銭を取って、通行する人たちの生活を脅かすようなことが起きているということを実際に書いてらっしゃいます。つまり、国の威光を借りて庶民を苦しめているのではないかというようにことで、批判的なまなざしを向けています。

よって、今、現実には起きている人々の苦しみにどう対応するのが一番大事な点なのだが、それを先行する宗の中ではできていないかというのが、恐らく言いたかったところであります。穏やかな言い方をすれば、陥りがちな問題点を指摘したという表現をすると、もう少し柔らかくなっていくのかなとも思います。四箇格言のキャッチコピーは、とても勇ましく聞こえるのですけれども、半面、かなり攻撃的なニュアンスをもって人々に受け止められるのではないかと思います。

これは、元をただせば、私たちがお説教等で日蓮聖人のことを説明するときに使ってしまう四箇格言のイメージが実は問題です。私たちが四箇格言をお説教等で使い始めたのは、近代以降ではないかと中尾先生はおっしゃられますが、これが教科書に反映されてしまったと逆に考えることができるのではないかと思います。つまり、私たちがどういうイメージを抱くかによって、教科書の記述というのは、ある意味で変わっていくものではないかという気がいたします。

そこで、少し教科書の問題にもう一度立ち戻りたいと思います。教科書の記述で変わりえたものが、実際にあるのかどうか。浄土宗の記述が変わったところから今回のセミナーも動きましたけれども、もう一つ仏教に関連するもので、記述の変ったものが一個あります。最近ですと聖徳太子に関する記述が少し変わったと思います。高橋先生、中尾先生、その辺の経緯について、何かご存じでいらっしゃいますでしょうか。

中尾 聖徳太子については新しい記述を見ておりません。私が教科書に関与していた頃には、聖徳太子の全てのもの

を、事跡を肯定するのかという立場と、否定するという立場と、極端があつて、それを仲裁する意見が出てくるといふ時期なものですから、責任を持って言えば学説としてもちゃんと整理する必要があると思います。

**蓑輪** 昔は「聖徳太子」という表現で出ていたのですが、現在は、「厩戸王」に変わっているはずなのです。厩戸王の方が正面に出て、聖徳太子という表現が少し背景に退きました。

これは経緯がありまして、初めの出発点は歴史学の研究者、中部大学の大山誠一先生が、「聖徳太子はいなかった」というかなりセンセーショナルな研究論文を発表されました。その根拠にされたものは、聖徳太子の事跡を語る『上宮聖徳法王帝説』とか、『元興寺伽藍縁起並流記資財帳』です。この二つが一番よく使われていた史料なのですが、実は編纂史料であつて、九世紀の初頭ぐらいにでき上がったものであるとされています。その観点から、記事は信用できないというようなことを言われ始めて、それにくみして論陣を張られた方が、名古屋市立大学の吉田一彦先生です。吉田一彦先生も同様の立場に立って、聖徳太子はいなかったということを言われました。その後、大きな論争を巻き起こしまして、教科書の記述の上でも聖徳太子という表現が背景に退きまして、厩戸王という言い方になっていきました。これは、学会での論争を通じて少し見方が変わったことによつて、教科書の方に反映されるようになって、いい例だと思います。

同じように、浄土宗でも教科書の記述が変わってきましたが、学会における学説史だとか、問題点の整理だとか、新たな位置づけみたいなのが登場することで、記述が変わっていくということが、現実にはあると示しているような気がいたします。今日、中尾先生のご講演を聴きまして、日蓮聖人に関係する記述というのは、戦後すぐに来た教科書、『日本史概観』が一番の基になって、そこに出てきていた通説的なものが反映されていく感じになったのかなと思います。そう考えると、時代によってどういうふうに位置づけるかというのが変わってくることに

って、教科書の記述も変わりゆくのではないかと考えていいのだと思います。

つまり、結局私たちが、日蓮聖人をどのような存在として位置づけるのかというところに問題は落ち着いていくのではないかという気がします。先ほど大塚先生から、人の苦しみをどう対応するかというのが日蓮聖人の一番の特徴だったとおっしゃってくださいました。それを踏まえたうえでもう一度お聞きしたいのですが、どのように日蓮聖人を考えることができるか、ご意見をお聞かせいただければと思います。

高橋 そうですね。今日の話を伺って、日蓮聖人は、確かに四箇格言が独り歩きしている感じがあるなという気がします。ですが、突き詰めて考えていくと、法華経の信仰を突き詰めるところが日蓮聖人の大きいところで、ここが一番核になっていくべきだろうなと思います。もちろん法華経に対する信仰とか、法華経に対する考えというのは、日蓮聖人がオリジナルなわけではありませんので、それこそ歴史的に古いものがあつたわけで、ある意味、念仏もそうですけども、法華経も仏教の人々にとってはみんなベースになっているところだったわけですが、そこをもう一回改めて掘り下げようとしているところに、日蓮聖人の原点といえますか、もっと光を当てるべきところがあると思います。

では、なぜ法華経なのかというところをきちんと説明することが大事じゃないかなと思うわけでありませうけれども、とりあえず私は、今日のお話を伺って、そんなふうに感じている次第であります。

大塚 中尾先生の資料の後ろから三枚目をご覧いただくと、「日蓮についての記述は次の要点である」と記されています。戦後の『日本史概観』などをベースに、要点が一、二、三、四、五とあるのですが、この要点も説明の仕方次第で印象が変わります。例えば「日蓮についての記述は次が要点である。一、庶民の生まれである。二、庶民であるがゆえに、具体的に庶民を救うために権力に苦言を呈した。三、他宗も叱咤激励した。」としてはどうでしょうか。

要するに、他宗も頑張れと叱咤激励した。苦しんでいたたり、路端で骸となつている人々のために具体的に何かしようと訴えたということです。四、五はそのままでいいとすると、まとめ方や説明の仕方で随分印象が変わってきます。表現の仕方、説明の仕方だと思えます。中尾先生のペーパーをベースに解説させていただくと、そういうことだと思います。

**蓑輪** 中尾先生、それに対しては、いかがですか。

**中尾** 表現の仕方ですか。これはあくまで教科書の問題として取り上げたので、私の考え方とは違うことを、一応はつきりさせていただと思います。要するに、日蓮という方を客観的に捉えようとする姿が、ありありと教科書によく分かるのです。日蓮宗などはまだいい方で、特に奈良仏教、旧仏教というのは、「混乱の極に達した」というような表現が随所にあります。それに対して批判をする向きもございますので、先ほど言いましたように、古代から中世の歴史の大きなうねりを考えた中で日蓮を客観的に見る。そういう意思の表れでもって、わざわざ冷たく書いたわけでございます。

と、これです。これで終わらなければいけないかと思うのです。やはり日蓮宗という宗派を考えますと、客観的視点ということではなくて、一つの神話化された意味を含めまして、日蓮という存在をきちつと捉えなさいけないのではないのか。ちょうど明後日、勸学院で日蓮聖人のご生誕の話をしますが、その中で、日蓮聖人は上行菩薩の再誕である、ご降誕であるという話が出てきませんかと思えます。出すつもりです。それを、客観的に上行菩薩のお生まれ変わりのわけがないという、そういう意味じゃなくて、やはり関連的に考えていく。そのときに、昔、日蓮聖人は上行菩薩がお生まれなられたというのではなくて、そのように考えるのは現在のわれわれの信仰であるというよう

な話だとか、そういう問題が出てきようかと思えます。ですから、宗教の問題と客観的観点の問題は別に考えるというのが、先ほどから申し上げている私の基本的な立場です。

例えばその話は、もっと分かりやすく言いますと、日本の神話のことです。『日本書紀』なんかを見ておきますと、先ほどちょっと話をしましたように、高天原の話だとか国生みの話など、「これは神話だから」というので、目的性のある神話だということで、教科書から全部拒否されております。けれども、神道の立場からすれば、天照大神だとか高天原の話を「意味ない」といつて退けたら、神道が成り立たない。むしろ神話の世界をどう意味づけるかということが神道にとって大変な問題だということを聞きましたけども、それと同じようなことで、日蓮聖人の神話というものを、きちっと確認していく必要があるのではないか。確認よりも、意味づける必要があるのではないか。そう思っております。どう意味づけるかにつきましては、教科書の問題と違いますので、ここでは省略させていただきます。

**襄輪** ありがとうございます。教科書に求められているものが、時代の流れの中で捉えられるのですね。日蓮聖人の仏法を客観的に表現しなければいけないという制約の中で書かれているものであるということも、先生が今、おっしゃってくださいました。教科書に求められているものが何かというのも、私たちは考えていけないのではないかと思います。

教科書には、いろんな記述があり、それを書いている先生方がいらっちゃって、グループの中でさまざまな文章を書いて、「こういうふう書き直してほしい」という具体的なアドバイスがその場に出されて、ある形に落ち着いていくというお話を、先ほど中尾先生からお聞きいたしました。私自身も、ある研究所で教科書調査官をやられた方とご一緒した時期がありました。一人は時野谷滋先生、もうお一方は、その上の村尾次郎先生です。また、その研究所には、実際に日本史の教科書を執筆している方もおられまして、教科書が具体的にどういうふうにしてでき上がって

いくのかということも、少し伺っていたところがございます。

そういうのを背景にしながらの疑問なのですが、「客観的」と私たちはいつも使ってしまいますけども、客観性は、実際にどう担保されているのか。史実に忠実にといい基準はよく言われると思うのですが、実際のところ、研究の上で書くときに、客観性とか実証性というのは具体的にどのくらい実現可能なかなというのは、すごく疑問に思うところです。歴史学を専門にしておられます高橋先生に、これは少しずれた質問かもしれませんが、客観性とか実証性というのは具体的にどんなものとしてイメージしているのか、少しお聞かせいただけたらと思うのですが、いかがでしょうか。

**高橋** すごく難しいところです。先ほどどなたかおっしゃいましたが、歴史というものは、やはり時代、時代で変わってくるのは間違いないところでして、私が常々思っているのは、歴史という元々不変のものがちつとあるというよりも、過去を振り返る人間がどういうふうな光を当てるかが大きいと思います。また具体的に歴史って、何か物理現象みたいに確としてあるわけではありませんし、理科系みたいに実験室で再現できるものでもありませんので、何かを見聞きした当時の人が物事を文書にして書かないことには残りませんので、書く人間がどういう関心を持っているかによっても変わっていくのだらうと思います。また、書く側にしても、振り返る側にしても、個人個人の関心というのも、それぞれの持っている素養にもよりますし、時代によっても変わってきますので、そういった意味で、歴史というのはどんどん変わっていくのだというのとは間違いないだらうなと思っております。

そのうえで、じゃあ、実証性をどう担保するのかということになるのですが、個人によって変わるとか、時代によって変わるということですけども、決して好き勝手に変えていいものではないわけでありまして、人によって言うことが変わってくると思うのですが、最低限ここだけは共有できるなと思うのは、何を根拠に書くのかということ

です。歴史を叙述する根拠というもので、史料という問題がありますが、史料に基づいて書きましょう、史料に基づいて発言しましょうということ。先ほど蓑輪先生のお話にありましたような、何をもって実証性にするのかということ、史料とかけ離れていないかどうかということですね。

あとは、文章を書くときに注意しなくちゃいけないのは、この史料からは別の見方もできるのではないだろうか。別の見方が複数許されるときに、その一つの立場を選択することが果たして妥当かどうか。もしかしたら、別の史料を組み合わせると、もう少し可能性が絞られていくのではないだろうか。そういったことも考慮することが、最低限の作法かなというふうに思っております。ほんとにくだぐだ述べましたけれども、要は簡単なことでありまして、史料に基づいて書きましょう、根拠に基づいて書きましょう、考えましょうということに尽きるところであります。

蓑輪 ありがとうございます。中尾先生、一言お願いいたします。

中尾 今、いろいろお話しなさってきますと、史料を客観的にみるという問題について、私どものように宗門に籍を置いて、しかも歴史の実証主義のような話をしなくてはいけないというのは、非常にづらい問題でございます。先ほど申しましたように分けて考えるわけですけれども、問題なのは、私も宗教の問題を取り上げまして一番悩んだのは、われわれが古文書だとか記録だとかいうことで触れる事実というのは、あくまで事件なのです。出来事の記録でございます。その中に、心の問題が出てこないのです。例えば日蓮聖人のご遺文だけを読んだだけでは、事件の話しかならない。

だから、事実として表された記述の中に何をつかむかということが、これは蓑輪先生の世界だと思っておりますが、と

かくすると、新しい古文書、新しい記録を見つけて、それで満足するおそれがあるのではないかと思っております。ですから、客観と主観ということの問題が非常に難しい、口で言うほど軽いものじゃないということを、よく理解しなくてはいけないと思います。

幸いに僧侶は仏教という世界を持っておりますので、仏教の世界観を持って事実を読み込んでいくというのは、日蓮聖人と同じような考え方かなと思っております。ですから、ここに日蓮宗の未来という話がありますけども、日蓮宗の未来をはっきりするためには、現在のさまざまな目にする事象を、法華経だとか日蓮聖人の考え方で読んでいかないと、未来はないのではないかと考えております。だから、どう意味づけるのか。それには、第一に日蓮聖人の遺文を読み込んでいくことだと痛感しております。ですから、事実だけで止まるのではなくて、その次を踏み出さないと、本当の未来というのは開いていかないのではないのかなという、当たり前のことではありますが。

**襄輪** ありがとうございます。今日の討論の一番言いたかったところは日蓮宗の未来を考えるとということでありまして、それは何によって可能かということでございます。日蓮聖人のご遺文を通して、ただご遺文を拝読するだけではなくて、時代背景など、さまざまなものを踏まえたいうえで、日蓮聖人が言おうとしていたことを私たちがきちんとつかまえること。ここから日蓮宗の未来は開けてくるということではないかと思えます。

私たちは、ご遺文だけはよく読んでいらっしゃると思うのですが、その当時の時代背景とか、なぜそのようなことをおっしゃられたのか、書いていらっしゃるのかというところを、少し見落としがちになってしまっていることが多いのではないかと思います。今日、大塚先生がおっしゃってくださいましたが、当時の人々の具体的な苦しみにもどう対応していくのかというのが、恐らく日蓮聖人にとって最初の出発点で、そのための道を探し続けられて出てきた答えが、お題目に収斂していったのだらうと思えます。そういうことを考えながら未来を見つめるときには、周辺のものに目

配りしながら遺文を読み、その心に迫ることで見えてくるものではないかというのが、先生方のご意見を聞いていて感じた次第でございます。